

□急性心不全患者における入院中食事摂取量の実態調査及び関連因子の検討

研究課題名	急性心不全患者における入院中の食事摂取量に対する実態調査及び関連する因子の検討
研究期間	2022年5月～2022年10月
研究対象	当院に急性心不全増悪にて入院された患者様
研究の目的・方法	<p>2018年心不全患者における栄養評価・管理に関するステートメントが発表され心不全患者への栄養介入というものが重要視されてきている。その中で、少なくとも6か月間経過観察した心不全患者においては7.5%以上の体重減少が、年齢、New York Heart Association (NYHA)機能分類、左室駆出率などの心不全の予後規定因子とは独立した予後不良因子であり、体重が保たれていることが予後良好であるとの報告がAnkerらによって示され、body mass index (BMI)が保たれているほうが予後良好であるという概念が導入された。欧米人と日本人では体格が異なるため日本人を対象とした疫学調査で論じる必要があるが、日本人でも同様の現象が報告された。ただ、心不全増悪患者は、入院中摂食不良状態に陥るものも少なくないことを臨床現場では経験している。心不全増悪時には、体重減少、退院時のADL低下など様々な報告があり、入院中の食事摂取量低下も体重、ADL低下の要因であると考えられる。しかし、入院中の急性心不全患者の摂食状況について明らかにした報告はされていない。低栄養が問題となる現代の医療では、入院後早期にエネルギーを充足させ、体重減少を防いでいく必要がある。そのため、今回急性心不全患者の入院後の摂食量の実態調査及び関連因子を検証することとした。さらに単施設研究では地域や病院の特色が影響する可能性がある為、多施設での検討が必要であるということで本研究の代表施設である枚方共済病院と共同で実施する。</p>
研究に用いる試料・情報	<p>診療録情報</p> <p>試料：アンケート調査内容（血液検査データ、筋力評価、MNA-SF、塩分チェックシート）</p>
研究責任者・担当者	循環器内科部長 渡邊圭祐